

Proper name anomia を呈した症例に試みた 学習訓練の効果について

The effect of proper name study training attempted to the case of proper name anomia

貝梅 由恵* 尾関 誠* 原 寛美* 青木 理枝*

要旨：左下側頭回～中側頭回の脳出血後に，proper name anomia を呈した 1 例に対して，急性期から社会生活へのスムーズな適応を目指した認知リハビリテーションを行った。人名の学習訓練（反復訓練，エピソード訓練，語呂合わせ訓練）と固有名詞手帳の外的補助具の訓練を実施した。結果は，小森らに報告されているようにエピソードを交えた学習が有効であることが再び確認された。頻回に接することのない人物においてもエピソード訓練を継続的に実施することにより，人名の想起が可能であった。また，固有名詞手帳の利用がストレスの軽減をもたらしたと考えられる。以上より proper name anomia の性質を考慮し多面的なアプローチをする必要があると考案した。

Key Words：固有名詞失名辞 (proper name anomia)，外的補助具，人名学習，エピソード，左側頭葉病変

はじめに

今回われわれは，左下側頭回～中側頭回の脳出血により，人物の同定は可能であるが，人名の想起いわゆる固有名詞の想起が障害される proper name anomia を呈した症例を経験した。人名の学習や想起は，人間関係や社会生活を営む上での基盤であり，日常生活を送る上では欠かせない能力である。名前の想起が困難であっても，写真が提示されると，その人物に関する詳細なエピソードの想起が可能といった現象が観察される（小森ら，2002）。proper name anomia に対する人名学習訓練には，エピソードの活用が有効であるとの報告がある（小森ら，2002）。今回われわれは，訓練効果の高いエピソード訓練に加えて，日本語特有の記憶術といわれている語呂合わせ訓練，記憶の基本的な方法である反復訓練を比較して，有効な学習方法を検討した。また同時に，固有名詞手帳の外的補助具の訓練を実施した。

人名学習訓練，固有名詞手帳の活用を実施し proper name anomia に対するリハビリテーショ

ンについて考案した。

1. proper name anomia とは

proper name anomia とは，人物・地名などに関する情報は保たれているため，写真を見て，その同定は可能であるが，固有名詞を想起することが選択的に障害されている状態と報告されている（三村ら，1997）。固有名詞とは，人物名，地名，固有物，特定の動物，建物や公共機関，新聞や雑誌，本・音楽・美術作品のタイトル，映画や漫画の主人公等が挙げられている（三村ら，1997）。より新しい人名ほど想起が困難（小森ら，2001），意味的な基盤のない無関係な言葉の学習に困難がある（Lucchelli & De Renzi, 1992），重症例ほど地誌名など他のカテゴリーの固有名詞までもが想起困難になる（Lucchelli & De Renzi, 1992；Hanley & Kay, 1998）。

責任病巣としては，固有名詞の貯蔵されている

* 特定医療法人 慈泉会 相澤病院 総合リハビリテーションセンター Yoshie Kaibai, Makoto Ozeki, Hiromi Hara, Rie Aoki : Rehabilitation center, Aizawa Hospital

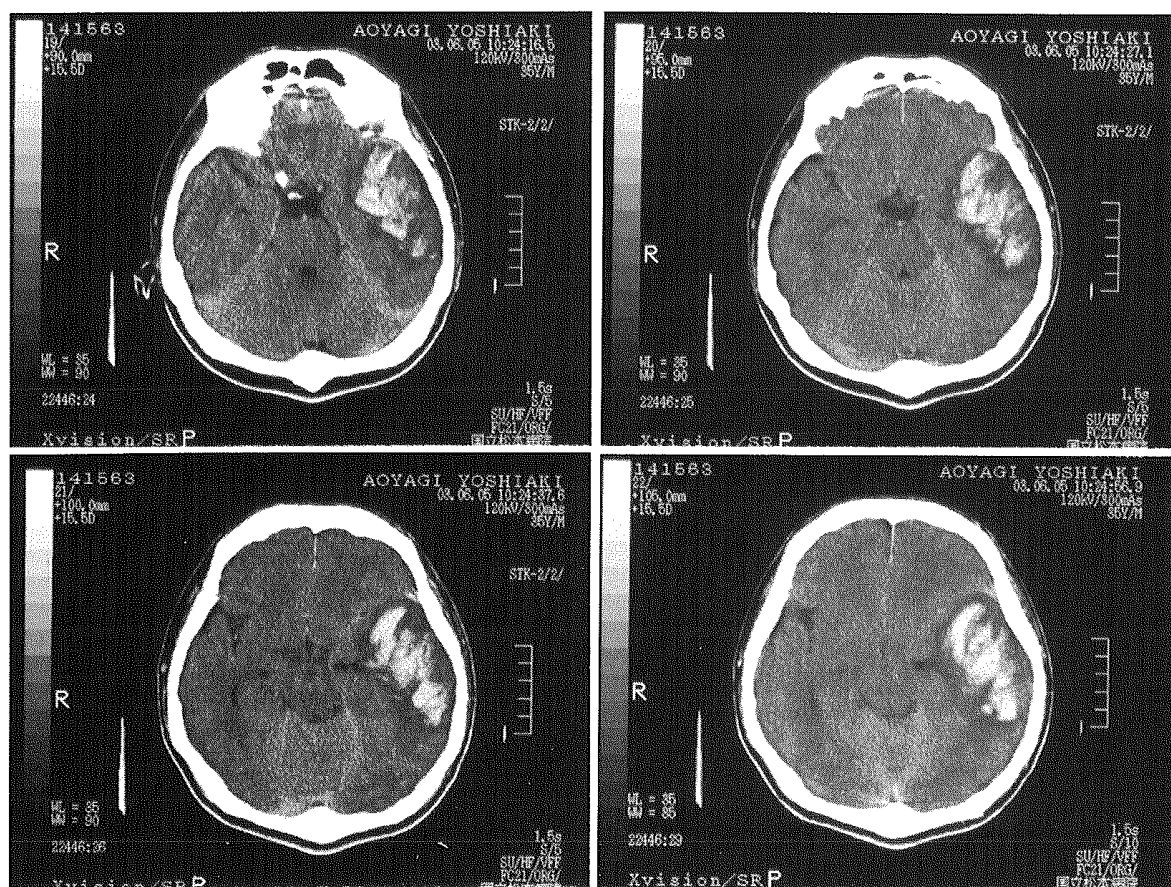


図1 CT画像 (H 15.7.25)

左側頭葉病変と左視床病変により生じると考えられている (三村ら, 1997)。

2. 症 例

35歳, 男性, 右利き

主訴: 人の名前が出てこない。顔を見れば誰かはわかる。

家族より: 家族の会話についてこれない。土地名などの名前が出にくい。

診断名: 脳出血

現病歴: 平成15年6月5日発症。松本市内の病院にて緊急開頭血腫除去術を実施。失語症, 右片麻痺認められたが改善。平成15年7月2日, 頭蓋骨形成術を施行。計算力の低下, 記憶力の低下が残存。平成15年7月22日, 高次脳機能のリハビリ目的にて当院紹介となり転院。

既往歴: 症候性てんかん

職業: 電気設備業

最終学歴: 高等学校卒業

家族構成: 妻, 娘, 息子との4人暮らし

CT: 左側頭葉下側頭回~中側頭回に血腫 (図1)。

3. リハ開始時の状態

リハビリテーション開始時にはADLは自立されていたが, 家族の名前が想起しにくい, お見舞いに来てくれている人が誰なのかはわかるけど名前が思い出せないとの訴えがあった。この他にも, 親戚・同僚・近所の人物に関しても同様の訴えがあった。また, 物の名前, 食べ物などの名称も想起しにくいとのことであった。家族からは, 会話に出てくる知人の名前がわからないため, 会

表1 神経心理学的評価結果 (入院時評価: H 15.7.22~8.6)

三宅式記銘力検査	有関係対語	3-3-6
	無関係対語	1-3-1
WMS-R	一般記憶指標	60
	言語性記憶指標	61
	視覚性記憶指標	74
	注意/集中力指標	62
	遅延再生	71
日本版 RBMT	標準プロフィール点	24
WAIS-R	全般的 IQ	64
	言語性 IQ	65
	動作性 IQ	72
KOHS 立方体組み合わせテスト	IQ	93
	TMT	
	A	147 s
	B	246 s
	比	1.67
K-WCST	達成カテゴリー	2
	保続	14

話についていくことができない、店の名前、土地名などの名称が出にくいという情報があった。

4. リハ初診時所見

身体状況: 意識清明, 麻痺なし, 歩行, ADL 自立。

神経心理学的な所見 (評価期間 7/22~8/6)

神経心理学検査の結果を以下に示す。

知能 (表 1) に関しては, WAIS-R において全般的な知能の低下を認めていたが, コース立方体組み合わせテストでの IQ は正常範囲内であった。

記憶 (表 1) は, WMS-R において全般的な低下が認められた。しかし, 日本版 RBMT の結果や日常生活場面から, 地誌の見当識, 時間的な見当識, 約束等は保たれており, 日常生活上では記憶の低下による問題は認められなかった。

言語面 (図 2) においては, SLTA により低頻度語, 語想起に低下が認められた。また, 意味記憶検査では, 著明なカテゴリーの特異性はないが, 全般的に軽度の障害を認めた。

一般名詞の想起 (表 2) に関しては 100 語呼称検査で著明な低下は認められなかった。しかし, 固有名詞 (表 2) においては, 現代の著名人, 歴史上の人物, 有名建造物について調べたところ, 人物に関する意味的な情報は比較的保たれていたが, 固有名詞の呼称の低下が著明であった。対照群として, 本症例の低下を示すために, 若干教育歴は異なるが, 同年代の病院スタッフ 2 名に対して, 同様に固有名詞の評価を行った。その結果, 顕著な差が認められ, 本症例の固有名詞の呼称能力の低下が明らかとなった。さらに, 身近な人名や, 仕事上扱う特殊な道具の呼称の低下も認められていた。

5. 障害像の分析

意味的な知識は概ね保たれているものの, 一般名詞の呼称に比べ固有名詞呼称の低下が著明であった。評価上では記憶の低下も認められたが, 病棟内 ADL は自立されており, 約束の遂行など日常生活場面での問題は認められなかった。しかし, 本人から固有名詞のエピソード想起が困難で

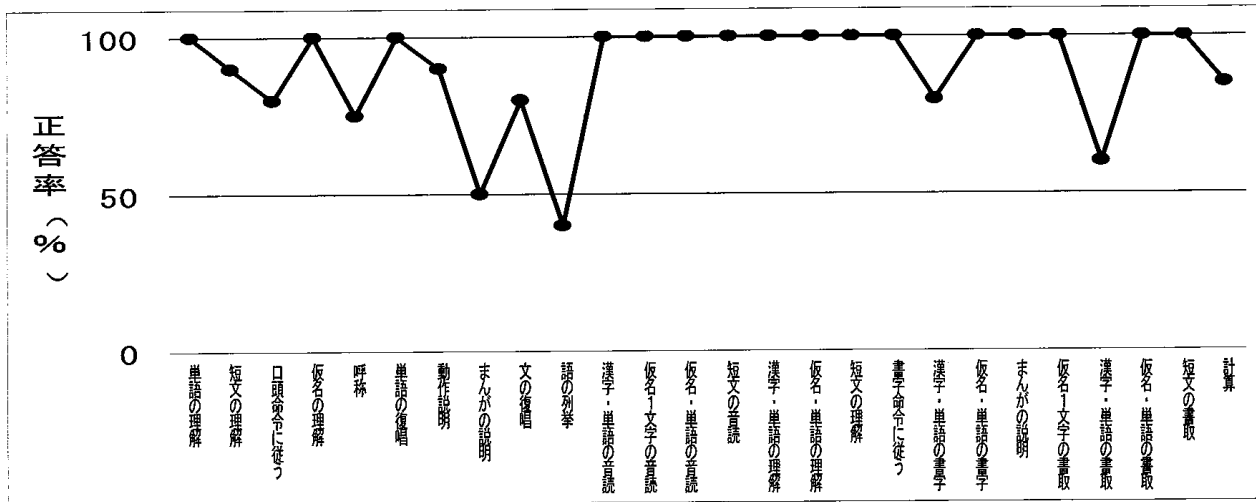


図2 SLTA結果

表2 名詞呼称検査

		本症例	対象群
固有名詞	歴史上の人物	1/20	17~18/20
	現代の著名人	6/20	
	有名建造物	5/20	16~18/20
	家族	2/5	
	身近な人物	12/19	
一般名詞	100 語呼称検査	89/100	

あるとの訴えが強く、病棟内スタッフの名前の学習に困難を極めた。著名人のみならず地誌名、家族など身近な人物についても想起が困難であり、本症例の固有名詞想起の障害は重度であると考えられた。

6. リハビリテーションプログラム

顔から人名想起が困難である proper name anomia に対して、今回は手帳訓練でも人名学習訓練でも顔写真は用いなかった。その理由は、まず第一に言語的記述から顔を想起でき、顔写真が無くとも十分であったこと、そしてリハビリ終了後も本症例は同様の方法で継続していける実用的な手段を目指したためである。また最近ではデジカメラやコンピューター等、手軽に顔写真を取り込む道具が普及しているが、本症例には利用習慣がな

かったため、より日常生活内に取り入れ易く汎化しやすい方法を検討した。

a. 固有名詞手帳訓練

目的

若年で職場復帰が必要であり、今後頻回に会うことのない人物名の想起、新たに出会う人物名の想起、また職業上特殊な物品を扱っているためその物品名の呼称など、その場での早急な対応の必要性に迫られることが予想された。また本症例は、入院当初から家族など身近な人物の人名想起も困難であり、家族の人名想起すら困難な状態は大変なストレスになると考えられた。さらに、学習保持が困難である proper name anomia の性質を考慮すると、固有名詞の想起が困難な時にすぐ名前を確認できる外的補助具の利用の必要性が考えられ、固有名詞手帳の訓練を実施した。

	顔の特徴	性別	顔の想起	名前
1	目が細く髪長い	男		
2	鼻のすーっと通った出っ歯さん	女		

図3 反復訓練用紙

	顔の特徴	性別	情報・思い出など	顔の想起	名前
1	目と口の大きい	女	若く見えるけど子供がいる		
2	メガネの丸顔さん	女	食べ歩きがとて好きな人		

図4 エピソード訓練用紙

	顔の特徴	性別	語呂合わせフレーズ	顔の想起	名前
1	鼻の横にほくろ。髪を後ろに束ねている	女	古いタイプの〇〇さん		
2	メガネをかけて、ほっぺにほくろ	男	期待通りのガリ勉君、〇〇さん		

図5 語呂合わせ訓練

訓練

手帳獲得の訓練方法は、家族、同僚、近所の人、病棟スタッフについて、氏名、顔の特徴、職業、年齢、性別、関係、エピソードを記載、物品名に関しては名称、視覚的な特徴、用途を手帳に記載し、常に携帯してもらった。

b. 人名学習訓練

目的

外的補助具の訓練同様、今後症例が復職や地域活動への参加をしていくにあたり、新たに人物を覚える必要性、仕事上の特殊物品名の呼称能力は必要である。そこで、有効な固有名詞の学習方法を模索し、その学習方法を獲得することを目的とした。

訓練方法（学習方法）

人名学習訓練は、反復訓練、エピソード訓練、語呂合わせ訓練からなる。

訓練に使用した人物は、入院生活内で本症例と直接関わりがなく、その人物とのエピソードが形成されていない病院スタッフ30名。30名のスタッフとは、1人に対し約3分間自己紹介を兼ね

て会話をし、そのときの印象や会話内容を控えた。そして、30名の病院スタッフを3条件に10名ずつランダムに振り分けた。反復訓練は顔の特徴と名前（図3）、エピソード訓練は顔と名前と対象人物の情報や実体験を通じて得られたエピソードの記述（図4）、語呂合わせ訓練は顔と名前と人名の語呂合わせのフレーズを写真を見ながら記述し（図5）、人名学習訓練用紙を作成した。訓練時は人名学習訓練用紙に記載されている手がかりから、顔の想起の可否、人名を記述した。自宅では各訓練を毎日1回実施した。

①反復訓練：顔の特徴、性別の2つの情報から人名を想起。

②エピソード訓練：顔の特徴、性別、その人物の情報、思い出の3つの情報から人名を想起。

③語呂合わせ訓練：顔の特徴、性別に加え、語呂合わせのフレーズの手がかりから人名を想起。

訓練時には、誤りなし学習を配慮し、人名がわからないときや曖昧なときは記入を控えるようにした。一通り記入し終えたら、自分で答え合わせをし、正しい答えを見ながら1回復唱した。訓練効果の評価は、外来通院時に訓練対象の写真から

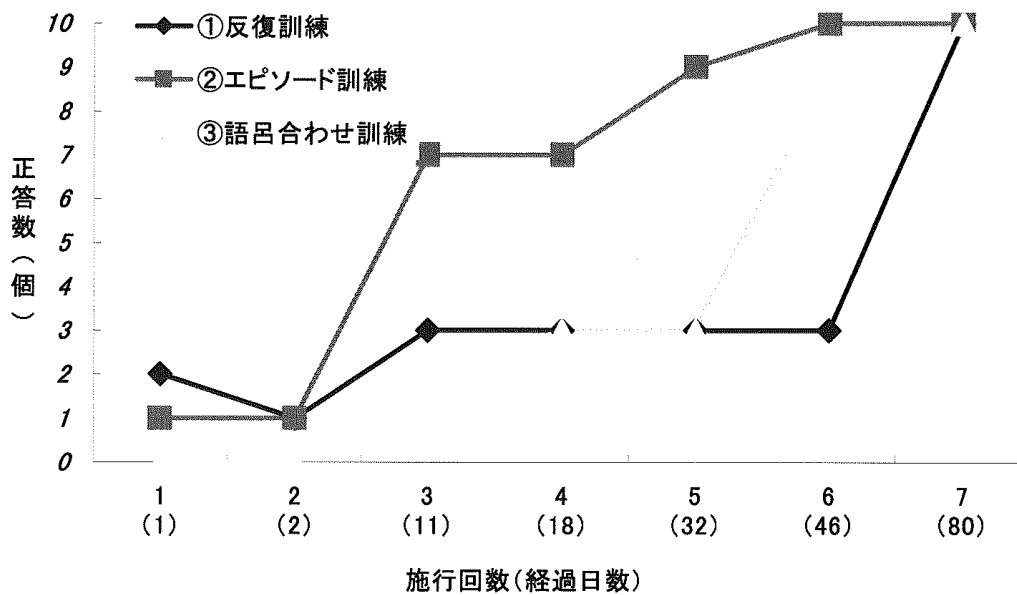


図6 人名学習訓練の経過

人名想起が可能であるかどうかを確認した。

7. 訓練経過および結果

a. 固有名詞手帳訓練

外的補助具である手帳の活用は、必要性の認識が低く、手帳をパラパラと見る程度で、利用の定着に難渋した。その後、日中頻回に手帳を参照した効果により、曖昧であった家族、同僚の名前の想起が可能となっていった。継続して、近所の人物、親戚などの人名も手帳に記入したが、手帳利用の頻度は減少していった。しかし、人名学習訓練の結果の改善に伴い、手帳に自ら想起困難である人名を記述し確認する、思い出せない時には手帳を参照するといった行動が観察された。

b. 人名学習訓練

人名学習訓練の結果を(図6)に示す。初回、2回目の評価の結果は不良で、3つの訓練の間に差は認められていなかった。訓練開始から3回目の評価時に、エピソード訓練において正答数7/10と高値を認め、その他2つの訓練に比べ著明な学習効果を示した。その後もエピソード訓練においては人名学習が維持されていた。しかし、反

復訓練と語呂合わせ訓練は、評価回数が5回に達しても正答数の著明な向上は認められなかった。この段階で先行研究同様、エピソードが有効と判断した。この効果が各条件で振り分けられた人物に特異的でないことを確認するために、全ての条件にエピソードを加えて継続した。すなわち5回目の評価以降、反復訓練、語呂合わせ訓練の全ての人物についてもエピソード情報を加え、訓練を継続した。その結果、若干の差はあるものの6回目以降の評価では、他の条件に振り分けられた人名学習もエピソードを付加することにより正答数が向上した。

8. 考 察

proper name anomia を呈した本症例は、若年であり、今後職場復帰、積極的な社会参加が必要であった。取引先との関わりや職業柄特殊物品を扱うため、これらの物品名、人名の想起が困難であれば、仕事の円滑な遂行を阻害する恐れがある。円滑に仕事を遂行し、人名想起困難によるストレス軽減を図るため、代償手段としての固有名詞手帳の導入と有効な人名学習訓練を行った。

a. 固有名詞手帳訓練

本症例は、発症直後より著名人のみならず地誌名や家族の名前の想起にも困難を訴えており、proper name anomia の重症例であると考えられた。家族の名前すら想起できないことは、大変なストレスがかかるため、いつでも調べられるようにする代償手段が必要であると考え、固有名詞手帳を作成した。また小森らの研究によると、エピソード訓練の効果は訓練終了後ただちに消失し、proper name anomia が根本的に改善されることはなかった。学習効果が持続しないのであれば、復職時においても代償手段として固有名詞手帳を利用する必要性がある。

本症例は、手帳の必要性の認識は低かったが、日中頻回に手帳を参照することにより、曖昧であった家族、同僚の名前の想起が比較的早期に可能となった。しかし家族、同僚の人名想起の習得をした段階で満足してしまったのか、手帳利用の頻度が減少し、近所の人物、セラピストの名前の想起が可能になるまでには時間を要した。また、固有名詞手帳に記述しなかった著名人、歴史上の人物や有名建造物など、他のカテゴリーについては遷延した。近所の人物、セラピストに対しても早期から手帳の参照を行っていたが上記のように家族・同僚との間で差が生じたのは、エピソードの情報量の違いにあったのではないかと考えられた。この違いは人名学習訓練におけるエピソード訓練と反復訓練の学習効果の違いからも支持される。こういった一連の過程により家族や同僚の人名想起が早期に可能となったため、ストレスの軽減につながったと思われる。

また、本症例にとって、2つの訓練を同時に実施したことは有効であったと考える。同時に実施していた人名学習訓練を継続していく中で、固有名詞手帳を活用しはじめ、エピソード訓練と同様の方法で人名学習を試みるといった行動変容が観察された。こういった認識の向上が今後の復職時、社会参加時の手帳利用への汎化の一助となると考えられた。今後より能動的に記入・参照できるようにになればADL上の問題を改善する代償手段として実用的になるとと思われる。

b. 人名学習訓練

今後就労、地域活動など積極的な社会参加において、新規の人名を覚えることや、人名想起の必要性に迫られることが予想されたため、有効な学習方法の検討を行った。小森らの研究によりエピソードの情報量の付加が高いほど想起能力の保持、すなわち訓練効果が高かったことが報告されている。そこで今回われわれは、訓練効果の高いと思われるエピソードを交えた訓練と2つの訓練を比較した。その結果、小森らの報告と同様にエピソード訓練は他の訓練に比べ著明な学習効果が認められ、再び人名想起におけるエピソードの重要性が確認された。またこの効果はエピソード訓練に使用した人物名に特異というわけではない。なぜなら、反復訓練、語呂合わせ訓練に用いた人物についてもエピソードを付け加えることで改善が認められたからである。

この訓練から実際に会ったり、話す機会の少ない人物においても、エピソードを付加しての継続的な学習により、人名の想起が可能であることが示唆された。しかしながら、人名学習の効果は持続しないといわれているので、今回確認された学習効果を維持するのに必要な学習頻度を検討していく必要がある。

c. Proper name anomia の特性について

Proper name anomia の特性として、著名人の名前の想起および学習の困難 (Lucchelli & De Renzi, 1992; Setti ら, 1999 など)、重症例になると人名のみならず地誌名など他のカテゴリーの固有名詞の想起も困難になる (Lucchelli & De Renzi, 1992; Hanley & Kay, 1998)。人名学習訓練後の効果は終了後に直ちに消失する (小森ら, 2002) などが挙げられる。

本症例は当初、家族をはじめ、著名人、歴史上の人物、有名建築物などの名前の想起が困難であった。その後、手帳などを利用して家族の名前の想起は可能になったが、歴史上の人物、建造物などについては若干の改善はあったものの大きな変化はなかった。この違いの原因は、家族には数多いエピソードがあることも勿論挙げられるが、エピソードを明示的に追体験することが重要と考

えられる。例えば、この徴候は本研究におけるエピソード訓練と反復訓練の違いに見られる。すなわちどちらも一度は会ったことのある人物であり、ある程度のエピソードは形成されているはずである。それにもかかわらず両者に違いがあるのはエピソード訓練の人物名ではエピソードを明示化することが頻回にあったが、反復訓練の人名の場合にはそれが無かったためと考えられる。このようにエピソードを明示化し再学習することが重要であると考えられ、proper name anomiaの多くの症例は家族・友人に対してはこの作業を頻回にそして無意識に行っているため、家族・友人に関しては想起が可能になっている可能性がある。実際、本症例は親戚や友人であっても疎遠であったり、会う機会のすくない人物ほど想起が困難であるが、その一方で著名人であってもテレビ観戦でしばしば目にする機会のある数名の好きなプロ野球選手については想起可能である。

以上のことより、エピソードがあっても繰り返し追体験できない人物、いわゆる固有名詞に関しては、想起困難な状態が継続すると思われる、やはり代償手段である手帳を利用していく必要があ

る。

文 献

- 1) Lucchelli, F. & Renzi, D.E.: Proper name anomia : Cortex, 28, pp.221-230, 1992.
- 2) Hanley, R. & Kay, J.: Proper name anomia and anomia for the names of people ; functionary dissociable. : Cortex, 34, pp.155-158, 1998.
- 3) Saetti, M.C., Marangolo, P., Renge, D., et al : The nature of the disorder underlying the inability to retrieve proper names : Cortex, 35, pp.675-685, 1999.
- 4) 三村 将, 加藤元一郎, 鹿島晴雄: 人名学習のリハビリテーションの問題点と今後の展望, 認知リハビリテーション 2 (2) : pp.8-21, 1997.
- 5) 小森憲治郎, 池田 学, 牧 徳彦, ほか: 人名早期困難例における人名学習訓練—有名人の顔写真を用いて, 認知リハビリテーション 2001 : pp. 66-73, 2001.
- 6) 小森憲治郎, 池田 学, 鉾石和彦, ほか: 人名想起困難例における人名学習訓練 (2)—エピソード記憶を応用した人名学習—, 認知リハビリテーション 2002 : pp.70-77, 2002.